本科１期７月度

解答

Ｚ会東大進学教室

高１東大国語

高１東大・京大国語

11章

【添削課題】

出典…『枕草子』第二五一段　／　オリジナル問題

現代語訳

全てのことにまさって思いやりのあることが、男は言うまでもなく、女もすばらしいと思われる。形式的な言葉であるけれども、（したがって）痛切に（自分の）胸にしみ通ることはない（程度の言葉である）けれども、気の毒なことに対して、「お気の毒です」とか、（また）かわいそうなことに対して、「ほんとうにどんなふうに思っていることでしょう〔＝どれだけ悲しいことでしょう〕」などと言った言葉を、（人から）伝え聞いたのは、直接向かって言っ（てくれ）たのよりもうれしい。なんとかしてその人に、「思いやりが胸にしみました」とでも（言ってこちらの感謝の気持ちや態度を）見せたいものだと、いつも思われることだ。

確実に（自分を）気にかけてくれるはずの人や、必ず様子を見に来る人の場合は、（思いやりのある言葉をかけてくれるのは）当然のことなので、格別どうとも思いはしない。（けれども）それほどのつきあいであるはずもない人が、受け答えをこちらの気持ちが安心なようにしてくれるのは、うれしいことである。（それは）大そう簡単なことだけれども、実際にはほとんどありえないことであるよ。

解答

問1　(1)＝いうまでもなく〔7字・解答例〕

問2　(2)＝(エ)　(3)＝(ウ)　(5)＝(ア)

問3　(a)＝入ら　(b)＝思ふ　(c)＝伝へ　(d)＝言ふ　(e)＝見え

問４　思いやりのある言葉をかけてくれること。〔解答例〕

特別問題

受け答えを気持ちが安心なようにしてくれるのは、うれしいことである。

【問題】（自習）

出典…『伊勢物語』二四段　／　西南学院大学・改

現代語訳

昔、ある男が、片田舎に住んでいた。その男は、宮中勤めをしに行くと言って、（女と）別れを惜しんで出かけたまま、三年帰って来なかったので、（女は）待ちあぐねていたときに、とても心をこめて求婚してきた人に「今夜結婚しましょう」と約束をかわしたところ、そこへこの男が帰って来た。（男は）「この戸をあけて下さい」とたたいたが、（女は）開けないで、歌を詠んでさし出した。

あらたまの……三年もの間待ちあぐねて、私はちょうど今夜、新枕（にいまくら）をかわす〔＝新しい男と結婚する〕のです

と詠んでさし出したところ、

梓弓……（いろいろなことがあった）長い年月を重ねて、私があなたを愛したように、あなたも新しい夫を心から愛しなさい

と男は詠んで、立ち去ろうとしたので、女は、

梓弓……あなたが私を愛してくれようがくれまいが、昔から私の心はあなたに慕い寄っていましたのに

と詠んだけれども、男は去っていった。女はひどく悲しく思い、あとから追っていったが、追いつくことができず、清水が湧いている所で倒れ伏してしまった。そこにあった岩に、指から流れ出る血で書きつけた。

あひ思はで……私の愛にこたえてくれないで離れていった人をひきとめることができず、私の身はもはや死んでしまうようです

と書いて、その場で死んでしまった。

【注】

＊1「あらたまの～」の歌＝「あらたまの」は、「年」にかかる枕詞。

＊2「梓弓真弓槻弓～」の歌＝「梓弓真弓槻弓」は、「年」を導き出すための序詞。「様々な弓があるように、様々なことがあった年月」の意、または「弓に数々あるように、数々の長い年月」の意を表している（意味については異説もある）。

＊3「梓弓引けど～」の歌＝「梓弓」は、「引く」にかかる枕詞。また「よる」の縁語ともなっている。枕詞としての「梓弓」は、弓に縁のある語句を引き出す。例えば、「いる」「ひく」「はる」「たつ」「かへる」「もと」「すゑ」「や」「おと」などで

ある。

「引けど引かねど」の「引く」は、「心を引く」ことに掛け、「あなたが私の心を引こうと引くまいと」の意味を表している。

解答

問1　①＝(エ)　②＝(エ)　③＝(ウ)　④＝(ア)

問2　(a)＝ハ行下二段活用・連用形　(d)＝マ行下二段活用・連用形　問3　(エ)

問4　(b)＝(ア)　(c)＝(イ)　問5　女は死んでしまった。〔解答例〕

解説

問1　①「あはむ」は「あふ」の未然形＋助動詞「む」。選択肢を見ると、ここで問題になっているのは「あふ」の意味であることがわかる。「あふ」には現代語の「あう」と同じ「対面する」の意味もあるが、男女の間で使われた場合、「夫婦になる、結婚する」の意味で使われる。さて、傍線部①の後を読んでいくと、女の歌の中に「今宵こそ新枕（にいまくら）すれ」とある。この部分と「今宵あはむ」をイコールと考えれば、やはりこの「あふ」は結婚するの意味だとわかろう。（念の為、「新枕」は「男と女がはじめて一緒に寝ること」で、「初夜」を意味する。）

②「うるはしみす」という動詞（連語）を知っていれば迷うことなく(エ)が選べたはず。が、知らなくても、前後の関係からどうにか正解にたどり着くこともできよう。その際のポイントは、傍線部のすぐ上の「わがせしがごと」である。これを直訳してみる。「わが」は「私が」の意。「せしがごと」は、「がごと」が『格助詞「が」＋助動詞「ごとし」の語幹』で、「～のように」の意を表し、体言または連体形に接続する。だから「がごと」の上の「し」は過去の助動詞「き」の連体形である。そしてその上の「せ」は、過去の助動詞に接続しているから、サ変動詞「す」の未然形である。したがって、「わがせしがごと」は、「私がしたように」の意になる。この「私」とは当然歌を詠んでいる男のことである。こう考えれば、まず(ア)と(イ)が消せる。(ウ)だとすると、受身の意味がどこかになければならないが、それらしい単語は傍線部にはないので、消去法で(エ)が選べる。

なお、この言葉は、形容詞「うるはし（＝仲がよい）」に、接尾語「み」が付いて体言化し、これにサ変「す」をつけて動詞化したものである。

③「より」は「よる」で、「頼る、寄り添う」などの意味。「心が頼る、寄り添う」と考えればこの場合の「よる」は「心を寄せる→愛する」だと推測できよう。したがって正解は(ウ)。

④「あひ」＝「相」で、「お互いに」の意味。従って、傍線部を直訳すると「お互いに愛さないで」となる。「お互いに愛さないで」と言った場合、お互いに気がないという意味の場合と、片想いという、二つのパターンが考えられるが、女の方は歌にもあるように、男のことを愛しているので、ここでの「あひ思はで」には、「男が女を愛していない」というニュアンスが含まれていることがまずつかめる。したがって、(イ)と(エ)は消せる。傍線部が「思はで」と「～しないで」という形で、「かれぬる人」につながっているので、「あひ思は」ずの主体は「男」である。よって(ア)が選べよう。

問2

(a) この漢字が読めないとアウト。これは「へて」と読む。「へ」はハ行の文字、つまり「ハ行エ段」の音を持つ。さて、直後に「て」が付くので、連用形と分かるが、連用形がエ段音の場合、「け」一語以外は全て下二段活用である。したがって、ハ行下二段活用・連用形と判断できる。

(d) これは、覚えなければならない動詞の中にないので、「ず」を付けてみる。「とどめず」と「ず」の上がエ段音になるので、これも(a)と同じく「下二段動詞」だと判断できる。「む・め」で活用するので、マ行だ。「下二段動詞」は未然形と連用形が同形なので、活用形の方は、下の語との関係で考える必要がある。そこで下の語を見てみると「かね（かぬ）」とある。この「かね」は接尾語で、今でも「答えかねる」「致しかねる」というように使う語である。「しかねる」と言えることから分かるように、これは上に連用形が来るものである。

問3 副詞の呼応の問題なので、知らない人にはきつい問題かもしれない。着目すべきは「で」である。「で」は、その動作・作用が行われていない、また、そういう状態ではない、という「打消」の意味を表す接続助詞である。活用語の未然形に付く（この場合、「おひつか」が「おひつく」の未然形である）。したがって、ここの部分は「追いつかないで」となる。これを補う形で空欄Aに適当な語を入れるのである。

この「で」のように打消を表す語を下に伴う副詞は、選択肢の中では㈠と㈤である。㈠の「たえて」は打消を伴って、「いっこうに、全然、きっぱりと」などの意味。㈤の「え」は、打消の語を伴って、全体で、「……できない。よくも……しない。」という意味。

辞書を引きながらこの問題を考えて、㈠の「まったく追いつかないで」で意味が通るので、㈠を選んだ人も多いだろう。しかし、実はこれは、辞書よりも深い知識が必要とされる問題なのである。

「たえて」を、表面的に「一向に、全然、きっぱりと」と覚えている人にとっては、これが答えでもよさそうにみえる。この副詞は、「絶ゆ」に「て」が付いたものを副詞化したもの（テキストに出した「転成」だ）で、ここから「そういう状況がまったくなくて（←絶える、断絶する）」という原義を持つ。よって、この副詞のニュアンスは「はなから（〜ない）」というもの。これを大雑把に言い換えれば、「全然ない」になるので、辞書にはそのように載っているのだ（辞書の意味はみんな大まかなものだと思ってほしい）。この副詞の例として代表的なものに「たえて桜のなかりせば　春の心はのどけからまし」という歌の一節がある。これは通常「ぜんぜん桜がなかったならば」と考えられているが、ニュアンス的には「はなからこの世に桜なんていうものがなかったら」というのに近い。こういう意味だとわかれば、この空欄は、「はなから追いつかない」という意味になる。そうするとここには、「無理だと分かりきっているから、追いつく気がない」という意味、まさに「追いつく気力が絶えている」意味が出てしまう。これでは「いとかなしくて、しりにたちておひゆけど」の意に反する。よって㈠は選べない。

したがって、答えは㈤。「えおひつかで」は大雑把に訳すと「追いつくことができなくて」だが、この「え」は「得（え）」の副詞転成した語。「得」は英語の「have」にほぼ近いニュアンスを持つ動詞。「能力を身につけている」ところから、「え〜ず」で、「もともと〜という能力を持っていないので〜できない」という不可能のニュアンスを示す。「追いつく能力がなくて追いつけない」というのは、「男の走る能力」と「女」のそれに決定的な差があると昔の人は考えていたので、当然「え〜ず」で表現したのである。

問4　(b)の「および」は「おゆび」とも言う。（と言えば、わかるであろう。）この言葉を使っている有名な文章例を次に挙げておく。

「いと小さき塵のありけるを目ざとに見つけて、いとをかしげなるおゆびに捕らへて……」（『枕草子』「うつくしきもの」）

(c)は「ず」と付けてみると「かれず」になるので、「下二段動詞」だと分かる。とすると終止形は「かる」。選択肢の中で「か

る」と読めるのは、(イ)か(ウ)である。後は歌が直前での状況（＝「女が追いかけても男が離れてしまった」点）を詠んだものであることから、(イ)が選べよう。

問5　まず、主語を考える。傍線部のすぐ上に「と書きて」とあることから、傍線部の主語と、歌を書いた人物が同じであることがつかめる。よって、傍線部の主語は「女」であると分かる。次に具体的な傍線部の意味であるが、「いたづらになる」という語の意味を知っていれば簡単だが、知らなかった場合はどうすればよいのか。その場合は、もう一度「書きて」に注目する。ここの部分は「『……』という歌を書いて、（そして）……。」という文章になっているので、傍線部は、歌の内容に関係があると推測できる。歌には「わが身（＝女のことだ）は今ぞ消えはてぬめる」とある。「身が消えてしまう」というのは、どういうことか。端的に言えば「死んでしまう」ということだ。「私は死んでしまうようです」と歌を指の血で岩に書きつけて、どうしたのか、と考えれば、「死んだ」としか考えられるまい。したがって、解答は「女は死んでしまった。」となる。なお、「いたづらになる」は、「いたづらに＋なる」⟶「いたづらなり」の連用形。「いたづら」は「徒ら」と書き、「むなしいさま」を原義とする。「心いたづらになる」は、「虚ろな気持ちになる」ことになるが、「身いたづらになる」としたら、これは「身体の中身（＝魂）が空虚になる」＝「魂が身体から抜け出る」＝「死亡」を意味する。これが定型化して、単に「いたづらになる」と言っても「身いたづらになる」の意味で使われるようになったわけである。古代人の「言霊」思想から「死ぬ」というのは忌むべき言葉であって、これを使うのが不吉に思えることから、「死ぬ」を別の表現「いたづらになる」「失す」「かくる」などで表しているのである。

●メモ●

12章

【問題】（演習）

出典…清・兪樾『一笑』／オリジナル問題

書き下し文

客の至る有り。主人蔬食を具ふ。客悦ばず。主人謝して曰く、「家は貧しく市は遠し。肉を得る能はざるのみ」と。客曰く、「請ふ我が乗る所の騾を殺して之を食はん」と。主人曰く、「君何を以てか帰らん」と。客階前の鶏を指して曰く、「我君の鶏を借りて、之に乗りて帰らん」と。

現代語訳

客人がやってきた。主人は野菜の食事でもてなした。客人は喜ばなかった。主人は謝って言った、「私の家は貧乏で、市場も遠くにあります。（だから）肉を手に入れることができないのです。」と。（そこで）客人が言った、「（それならば）どうか、私が乗ってきた騾馬を殺して、これを食べてください。」と。主人は言った、「（それでは）あなたはどうやって帰るのですか。」と。客人は（家にあがる）階段の前にいる鶏を指さして言った、「私はあなたの鶏を借りて、それに乗って帰ることにしましょう。」と。

解答

問1　(1)＝かく　(2)＝そし

問2　(3)＝喜悦　(4)＝謝罪　〔いずれも解答例〕

問3　騾（我所乗之騾）

問4　①＝鶏（階前之鶏・君之鶏）　②＝けちな主人に対する皮肉〔解答例〕

【問題】（自習）

出典…『戦国策』「魏策」　／　立教大学

書き下し文

韓・趙相難ず。韓兵を魏に索めて曰く、「願はくは師を借りて以て趙を伐つを得ん」と。魏の文侯曰く、「寡人趙と兄弟たり。敢て従はず」と。趙また兵を索めて以て韓を攻む。文侯曰く、「寡人韓と兄弟たり。敢て従はず」と。二国兵を得ず怒りて反る。已にして乃ち文侯の以て己に講ずるを知るや、皆魏に朝せり。

現代語訳

韓の国と趙の国との間でもめ事が起こった。韓の国が魏の国に軍隊を要請して言った、「どうか（魏の国の）軍隊をお借りして、（わが韓の国に）趙の国を伐たせてほしい。」と。（それに答えて）魏の文侯は言った、「私〔＝わが国〕は趙の国とは兄弟の間柄です。決して（その言葉に）従うことはできません。」と。趙の国が、さらにまた（魏の国に）軍隊を要請して、韓の国を攻めたいと言ってきた。魏の文侯が言った、「私〔＝わが国〕は韓の国とは兄弟の間柄です。決して（その言葉に）従うことはできません。」と。両国とも魏の軍隊を借りることができずに怒って帰って行った。その後やがて文侯がその事を自分たちの為に謀ったことが判ると、いずれも魏の国の統治下に下った。

解答

問1　①＝すで　　②＝おのれ

問2　戦になりそうな状況。〔10字・解答例〕

問3　(1)＝魏国の軍隊（魏国の援軍）〔5字・解答例〕　(2)＝兵

問4　(エ)

問5　(ア)

問6　魏の文侯が、韓・趙どちらの援軍の要請をも断ることで、両国の戦争を防いでくれたことがわかったから。〔解答例〕

解説

問1　漢字の知識を問う基本的な問題。紛らわしい漢字に注意。「己」「已」「巳」は、すべて違う漢字である。このほか、今回出てきた「師」と紛らわしいものに、「帥」がある。「帥」は、「元帥」「総帥」などと使われるが、「軍の隊長」「率いる」といった意味を表す。

問2　語句の意味を問う設問であるが、漢文で一語の意味を問われたら、まずその語を含む熟語を思い浮かべよう。ここでは、「苦難」「災難」「艱難」といった熟語を思い浮かべてほしい。すると「難」には、「苦しみ」「わざわい」「うれい」と言った意味もあることが想像できよう。この語意から、韓・趙の両国はうまくいっていないことが想像でき、その具体的状況を本文から探せばよいのだ。本文で、韓の国が「願得二〜伐レ趙」と言い、そして趙の国も「攻レ韓」ということをしようと考えていることに着眼しよう。つまり、お互いが相手を武力によって倒したいと思っているのである。このことを十字以内で表現すればよい。なお、「難」には「あらそい・いくさ」といった意味がある。「兵難」といった熟語で使われる。

問3　「索レ兵」のために言った言葉が「願得二借レ師以伐レ趙」なので、「師を借りたい」とは「兵を借りたい」の意味だと考えられよう。とすると、「兵」と「師」は、ほぼ同じ意味の言葉であることが判る。さて「師」の意味だが、五文字でという指定があるので、単に「軍隊」や「援軍」だけではいけない。この場合、軍隊を所有している「魏国」を頭につけて、「魏国の軍隊」あるいは「魏国の援軍」として五字にすればよい。「師」はもともと、集団、その居住地、その長、ひいては指導者の意を表す言葉である。この時代では、「五旅（一旅は五百人）」を「一師」とし、「五師」を「一軍」とした。日本では、陸軍（現在は陸上自衛隊）の戦略単位を「師団」と言う。

問4　返り点のついている漢文を書き下し文にする問題であるが、まず、傍線部の前後を見て、傍線部と同じ、もしくは似たような部分はないか探してみよう。それが見つかれば、その読み方を流用もしくは応用すればよいのだ。ここでは、傍線部に「又」が使われていることに注目してほしい。この語によって、前にも同じような状況があったことがわかる。それを探して参考にすればよいのである。参考となるのは、まず1行目の「韓索二兵於魏一曰、」の部分だ。ここから、傍線部(c)の「索レ兵」は、「索」は動詞

で「もとム」、その下の「兵」は「索」の目的語となることがわかる。訓読すれば「へいヲもとム」となる。そして同じく1行目の「『願得借師以伐趙』」の部分から、傍線部(c)の「以攻韓」は、「もっテかんヲせム」と読むことができよう。これをつなげればよい。

問5 解釈問題。傍線部を書き下し文にすると、「二国兵を得ず怒りて反る。」となる。「而」は、文や語句をつなぐのに用いられる接続詞。順接としても逆接としても使われ、どちらであるかは、文脈から考えるしかない。文中で用いられている場合、訓読する時は、前の語の送りがなの末尾に、順接ならば「テ・シテ」、逆接ならば「ドモ・ト・トモ」とつけるのがふつう。ここでは送りがなに何もつけられていないが、これは連用形で下に続けるという、順接の場合の訓読である。傍線部を逐語訳すると、「ふたつの国は兵を手に入れることができず怒って帰った。」となる。これと合う選択肢は(ア)しかない。

問6 韓と趙の「朝レ魏」は、直前の「知三文侯ノ以テ講二於己一」に続いて行われている。したがって、これが、韓と趙の行動の直接的な理由と考えられる。訳すと、「文侯が自分（たち）のために謀ったということが判った」から、ということになる。ただし、これだけではなく、「魏の文侯がどのようなことを謀ったのか」を具体的に記す必要がある。この「己（自分たち）」とは、当然、韓と趙のことであるから、文侯が韓と趙に対して行ったことを本文から探す。それは、韓と趙が魏の統治下に入るほど尊敬のできる行動であるはずである。

三国の関わりを、本文の冒頭から追う。韓と趙の間で戦争がおこりそうになった。韓が、「趙を伐ちたいから軍隊を貸してほしい」と魏に頼みに行くが、文侯は、「わが魏の国は趙の国と兄弟国だからできない。」と断る。また、趙も、韓を伐つために魏に軍隊を借りに行ったが、文侯は、「わが魏の国は韓の国と兄弟国だからできない。」と断る。魏の文侯は、韓が来たときは趙を兄弟国と言い、趙が来たときは韓を兄弟国と言い、どちらの国の援軍の要請も断っている。さて、これが韓や趙を尊敬させた行動だろうか。

この行動の結果を考えてみよう。勝つために魏の援軍を必要とする韓と趙は、断られれば戦争を止めざるを得ない。結局、両国間に戦争はおこらなかったのである。つまり、魏の文侯は、韓・趙間の戦争を回避するために、どちらの援軍の要請をも断ったと考えられる。二国間の戦争を回避させた行動は、韓・趙の尊敬に値する。これが「韓・趙のために謀った」ことの内容である。以

上をまとめればよい。

※「皆」＝「みな」と読み、「みなそろえて」「みな一様に」の意味であるが、日本語とは語感が若干違う。漢文では、〝あちこちにあるものを寄せ合わせ、それを外から指して言う感じ〟の言葉である。傍線部(e)の場合、「皆朝魏」とあるのは、外側から客観的に述べているからであり、「(韓・趙)共朝魏。」と書いてあれば、韓・趙の側に立った記述になる。

●メモ●

13章

【問題】（演習）

出典…『論語』「李氏」　／　オリジナル問題

書き下し文

孔子曰く、「君子に三畏有り。天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。小人は天命を知らずして、畏れざるなり。大人に狎れ、聖人の言を侮る」と。

現代語訳

孔子先生がおっしゃることには、「君子〔＝学問・徳の備わった人〕には三つの畏れ敬うことがある。（それは）天命〔＝天の決める運命〕を畏れ、大人〔＝知徳のすぐれたりっぱな人間〕を畏れ、聖人のことばを畏れる（ことの三つである）。小人〔＝教養・徳がなく、つまらない人間〕は天命（の存在）を知らないから、（天命を）畏れない。大人には馴れ馴れしくし、聖人のことばをばかにする。」と。

解答

問1　小人〔1行目〕

問2　①＝三つの畏れ敬うこと。〔解答例〕　②＝「天命」「大人」「聖人之言」を畏れ敬うこと。〔解答例〕

問3　小人は天命を知らずして　**問4**　「小人」が「天命」を（畏れない）。〔解答例〕

【問題】（自習）

出典…『荘子』「外物篇」　／　オリジナル問題

書き下し文

恵子荘子に謂ひて曰く、「子の言は無用なり」と。荘子曰く「無用を知りて、始めて与に用を言ふべし。夫れ地は広く且つ大ならざるに非ざるなり。人の用ふる所は足を容るるのみ。然らば則ち足を廁りて之を墊り黄泉に到らば、人尚ほ用ふること有るか」と。恵子曰く、「用ふること無し」と。荘子曰く、「然らば則ち無用の用為るや、また明らかなり」と。

現代語訳

恵子が荘子に向かって言った。「あなたの言うことは、（実用的な内容でないので）役には立たない。」と。荘子は言った。「役に立たないということがわかることから始まって、役に立つということについて互いに話し合うことが出来る。そもそも、この大地は大変広くて大きいものである。（しかし）人間が使って役立てているのは、足を置く部分だけである。それならば、足を置く場所だけを残してあとは全部削り、地の底まで掘ってしまったならば、人間はそれでもその土地を役に立てることができるだろうか。」と。恵子は言った。「役に立たなくなってしまうだろう。」と。荘子は言った。「それならば、役に立たない（ように見える）ものが役に立つ、ということも明白である。」と。

解答

問1　実用的な内容でないので役には立たない。〔解答例〕　**問2**　足を置く場所　〔解答例〕

問3　しからばすなわちむようのようたるや、またあきらかなり。　**問4**　無用之用　**問5**　然則無　〔3行目〕

解説

問1　「無用」であったら「役に立たない」、それが「無レ用」となっているので「役に立つことはない」、ここから「用」＝「役に立つこと」という答えを書いた人はいないだろうか。確かに考え方としては悪くはないが、ここで聞かれているのは「訳」ではなくて「内容」である。したがって、傍線部の前後も併せて、一歩踏み込んだ解答を考えなくてはならない。

この問題の場合は、「どのように」役に立たないのか、あるいは「何故」役に立たないのか、を考える必要がある。手掛かりになるのは、傍線部(a)に続く荘子の言葉。そのなかで、「子言」が何に例えられているのかが正確につかめれば判るはずである。

問2　傍線部(b)を含む一文は「人の用ふる所は足を容るるのみ。」つまり、「AはBのみ」という文構造になっている。ここからA＝Bという関係がわかる。さてAの方だが、「人の用ふる所」という名詞なので、A＝Bから、Bも名詞でなければならないことがつかめよう。ここから、「容レ足」の後に「所」が省略されていると推測することができる。従って傍線部(b)の意味を考える際には、「所」を補う必要がある。さて、意味についてだが、「容器」という熟語からもわかるように「容」という字は「いれる」という意味を持つ。「足をいれる」すなわち、「足を置く」である。これに「所」を補って「足を置く場所」とすればよい。ただし、傍線部(b)を含む一文の直前で、「地は広く且つ大ならざるに非ざるなり」と、「地」の広大さを言っているから、ここはそれを受けていると考えて、「所」を「地」と解釈してもよい。

問3　送りがなもついており、再読文字もなく、返り点もレ点しか使われていないから、簡単であったはず。ただし、「也」と「矣」に注意。「也」と「矣」は共に助字である。助字については後の問題で詳しく説明するので、ここでは簡単に触れるに止めておく。

「也」は、文末で用いられる時は、ふつうは「断定」の意を表し、「なり」と読む。また、文中で用いられる時は、上の語句を強める働きをしており、「や」と読む。ただし、文末に用いられ、「疑問・反語」の意味を表している場合があり、その場合は「や」と読む。

「矣」の方は文末に用いられ、断定の意味を表すが、普通は読まない。ただし、詠嘆を表している場合があり、その場合は上の語の送りがなに「カナ」という助詞を付けることもある。

問4　無用之用……世の中で無用とされているものが、かえって非常に大切な用をすること。

問5　この文章は荘子が巧みな比喩を用いて、恵子の言う「役に立つ・役に立たない」を論破したものである。文章冒頭の恵子の言葉「子言無用」に対する荘子の言葉「然則無用之為用也、亦明矣」が、主題となる。この文章のように寓話的な比喩を含むものは、その主題は文末にくることが多い。比喩の部分が主題となることは、まずない。

L1J/L1
高１東大国語
高１東大・京大国語

Z-KAI

会員番号	

氏　名	

不許複製